「御宿正定：愛知簿記学校」の紹介
――簿記學を學ぶ人の心得――

杉原　誠志

はじめに

御宿正定（みしゅくせいてい）（1860～1913）は、名古屋にはじめて洋式簿記を広めた「愛知簿記学校」の校祖であった。しかし、その存在と功績を知る人は少ない。本稿は、少ない資料から、「御宿正定：愛知簿記学校」を紹介し、名古屋の洋式簿記草創期から第二次世界大戦まで、名古屋の商業教育を垣間見る。御宿正定の「教育理念」〈国家宗門：精神教育の源本〉については、『簿記學を學ぶ人の心得』を中心にして、『簿記學獨習雑誌』と御宿正定が発行した他の書物から、今後に、その研究を深めることとする。そのための前段階の研究として、「御宿正定」の功績と「愛知簿記学校」をまとめ、その紹介をする。

副題の『簿記學を學ぶ人の心得』は、御宿正定の「教育理念」を著した書物『国家宗門』の副題でもある。この書から、かつての「商業道徳」を学び直すことで、現代にこそ必要な「道徳心」を高められると考える。

1．研究のきっかけ

この研究のきっかけは、西川孝治郎の著書『日本簿記史談』において、「（簿記學獨習雑誌）第三号に貸借対照表が載っているのは、わが国でこの言葉を用いた最も早い一例である。」(7)との一文があり、「御宿正定：愛知簿記学校」の存在を知ったことによる。この『簿記學獨習雑誌：第三號』は、明治24年1月16日に出版された「通信教育も可能なテキスト」〈①11問の〔問い〕に〔答え〕②日記帳・仕訳帳・損益表・貸借対照表など、八種類の諸帳簿を作成するもの〉である。

通信教育の始祖は、ドイツのランゲンシヤイトだと言われ、1856年ベルリンでの外国語通信教育がはじまりだと考えられる(8)。通信教育と言えるか疑問は残るが、日本では、消息（手紙）による布教がなされていた。「法然（1133～1212）の弟子、親鸞（1173～1262）も消息や法話を書いている。特に京都に隠棲した晩年、親鸞は、師から離れて暮らす関東の同行宛に手紙で指導している。」(9)とある。また、江戸期の書簡による交流は、荻生徂徠の私塾にみることができる。「私塾・護園塾で古文辞学を教えていた荻生徂徠（1666～1728）は、書簡による指導のむずかしさを次のように書いている。」(9)との記述による。しかし、日本で、「学校式教育」のような教育制度が整ってからは、ランゲンシヤイトから34年後の『簿記學獨習雑誌』は、早い段階で通信教育がこの国で取り入れられた例だと考える。

『簿記學獨習雑誌：第三號』の最終頁には、切り取り可能な三ヶ月間有効の「特別質問券」が

綴じてある。この『簿記學獨習雑誌』は、当時の文部省認可（文部省検定済）ではなく、逓信省認可によることは、注目すべきことである。『簿記學獨習雑誌』に関しては、「複式商業簿記は、第五号で完結し、第六号以下は『複式製造営業を掲ぐべし』と予告はあったが、その存在は定かではない」[7]と記述がある。

本稿は、名古屋に、はじめて洋式簿記を広めた御宿正定が、明治17年に「愛知簿記学校」を開校した頃から、昭和20年までの名古屋の商業教育の一端も調査した。愛知簿記学校設立に関して、「正定は、福澤諭吉（1835～1901）を神様のように崇拝していた。諭吉の著書は、総べて座右に備えて愛読していた。（中略）学校経営や生徒訓育の指針を慶應義塾に求めていたようであった」[11]とある。この投稿は、名古屋の洋式簿記開拓者である「御宿正定」の功績と、御宿正定が開校した「愛知簿記学校」の存在を知らせたいとの思いによる。

2．御宿正定の功績

『郷土文化』には、「明治の文明開化の波に乗って、いち早く洋式簿記の開発普及に努めた御宿正定の実蹟は、あまり知られていない。」[10]との記述がある。御宿正定に関する世間の理解は、すでに昭和52年の段階で、このように述べられていた。現在では、昭和の時代よりもさらに歴史の中に埋もれていると言ってよい。その背景には、第二次世界大戦時（昭和20年 3 月19日）の空襲[12]により、愛知簿記学校の校舎はもとより、書類のすべてを焼失したことも一因と考える。現在確認できる限られた資料から「御宿正定」の功績を紹介する。

⑴ 「御宿正定」の彰徳碑

この石碑は、名古屋市内の八事山興正寺にあった。彰徳碑は漢文で書かれている。風化により、石碑の文字の判読は難しい。しかし、全文と訳文を『愛知県金石文集（上）』から読み解くことにより、ここから、「御宿正定」という人物に思いを馳せることができた。

〔訳文〕

「君諱は正定、幼字は平之丞、御宿は其の氏なり。（中略）徳川性高公に仕ふ。（中略）今国勢一変し、経世の務理財を急と為す。（中略）横浜に抵り、其の法を英人に学びその業成つて帰り、簿記夜学校を開く。時に明治15年 3 月なり。（中略）業を受くる者は八千二百余人に至る。県庁市衙並に物を賚ひ、以て之れを彰はす。（中略）長子正系家を承けて校主と為り、君の弟山本武五郎校長と為る。（中略）晩年推されて市会議員と為る。（中略）士は時を知るを貴ぶ、或は文威は武。勢を審にし力を量り、剣を投じ簿に対す。（後略）」[13]

〔彰徳碑内容の一部要約〕

簿記学を学ぶために横浜にて、その手法をイギリス人から学び、簿記学校を開いた。卒業生は8,200人以上であった。功績により、愛知県知事と名古屋市長から表彰を受けた。晩年は推薦されて名古屋市会議員となった。

（第 8 期市会議員　任期 3 年：明治43年10月～大正 2 年10月　総員48名）[14]

⑵ 「御宿正定」の著書

【国立国会図書館デジタルコレクション】

1	官設鉄道簿記学例題．下	御宿正定 著（平岩吉孝，1902）
2	官庁歳入簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1903）
3	銀行簿記学例題．下	御宿正定 著（御宿きた，1913）
4	郡役所会計部簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1902）
5	県立学校簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1892）
6	産業組合簿記	御宿正定 著（産業組合中央会愛知支会，1911）
7	司法省簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1903）
8	商館簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1903）
9	商業会社簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1890）
10	製造簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1892）
11	単式工業簿記学例題(3)	御宿正定 著（愛知簿記学校，1892）
12	単式製造簿記学例題．第1–3号	御宿正定 著（愛知簿記学校，1892）
13	単式製造簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1890）
14	単式農業簿記例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1892）
15	単式簿記学例題	御宿正定 著（御宿きた，1915）
16	複式家計簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1892）
17	複式商業製造簿記学例題	御宿正定 著（御宿正系，1917）
18	複式農業簿記例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1892）
19	府県庁簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1902）
20	保険会社簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1903）
21	紡績会社簿記学例題	御宿正定 著（愛知簿記学校，1903）
22	簿記学を学ぶ人の心得(1)	御宿正定 著（愛知簿記学校，1902）

現在、【国立国会図書館デジタルコレクション】には、御宿正定の著作物22冊の掲載がある。

①～㉑は、簿記学の例題（問題集）である。

⑪『単式工業簿記学例題』(3) 御宿正定著（愛知簿記学校，1892）を例にその例題のひとつを紹介する。

・日記帳二枚　・元帳四枚　・金銀出納帳一枚　・工事請負帳二枚

・職工人名簿一枚

損益並結算資本高ヲ問フ

（75回の取引（1日～31日）があり、27頁～28頁に解答がある。）

㉒『簿記學を學ぶ人の心得』については、『国家宗門』がこの書物の本題である。本稿の副題『簿記學を學ぶ人の心得』は、『国家宗門』の副題でもあり、精神教育の源本として、その内容が記し説かれている。

【国立国会図書館デジタルコレクション】の他にも、『近代会計百年』[15]日本会計研究学会には、28冊の御宿正定の著書が紹介されている。

⑶ 「御宿正定」を高く評価した財界人：野崎誠一

著名な財界人の一人で、「名古屋電気学講習所（現：愛知工業大学）」設立のきっかけもつくった野崎誠一（豊和工業社長）は、自伝書『蛙鳴抄：大福帳』の中で次のように述べている。「名古屋は、明治時代もっとも商業教育の盛んなところだと すでに天下に名あり 有名な市邨芳樹先生（中略）名古屋には明治の初めから簿記の私塾があったことを思い出す。（中略）それらの人々が角帯に前垂れ姿で、洋式帳簿にむかって毛筆をペンに変え、近代産業の興隆を培ったことであろう。（中略）その私塾主『御宿』という人の後裔が、どこにどうしていらっしゃるかを調査してもらったが、ついにみつけることができなかった。もしこの御宿さんの縁故の人を知っておられる方があったら、教えていただきたい。」[16]

また、野崎誠一は、同書にエピソードとして、「東海銀行赤塚支店は、私の尋常小学校四年生の頃に出来たが、そのときの”店員”のなかに、私のよく存じている人がいた。それは私の学校の先生で、教壇に立つかたわら”御宿簿記学校”に通い、先生をやめて銀行員になられたのだった。」[16]と紹介している。

この記述から、戦前まで、「愛知簿記学校」は、名古屋の簿記教育に大きな貢献と功績を持ち、経済社会で活躍した多くの卒業生を送り出していたことがうかがえる。

このことは、御宿正定自身の著『簿記學を學ぶ人の心得』の中でも、「私が設立致して居ります愛知簿記学校の生徒は書生や店員や又は軍人官吏銀行会社及び僧侶工夫等種々なる人々（中略）昼は新聞社へ勤めに行き夜学にて勉励して全科を了り能く活用が行われて米国の商館より日清会計主任に聘せられ全国にて頗る好評を新聞に記載された人もあり又英国清国韓国等へも聘せられたひともあり」[1]と記していることからも裏付けられる。

3．愛知簿記学校

⑴ 愛知簿記学校の沿革[5]

a．	明治15年１月12日	設立　校主 御宿正定　名古屋市南大津88番戸
b．	明治17年５月21日	認可　監督官庁より私立学校の開校を認可
c．	明治23年～24年	校外生制度『簿記學獨習雑誌』
d．	明治24年１月26日	教育勅語謄本下附
e．	明治43年７月	新校舎　狭隘のため新校舎建築
f．	大正２年５月	簿記学の普及発展の功労により、 愛知県知事名古屋市長両閣下より木盃及び金杯を下賜
g．	大正２年６月16日	新校主　御宿正系　（監督庁より校主たるの認可・就任）
h．	大正３年５月７日	新校長　山本武五郎（監督庁より校長たるの認可・就任）
i．	大正13年２月	校舎移転　名古屋市中区丸田町６丁目30番地

ｊ．大正14年４月　　珠算科新設

ｋ．昭和９年５月　　創立50周年記念事業

なお、御宿正定の後を継ぎ大正２年６月に新校主となった御宿正系（1899～1982）は、御宿正定の長子である。

また、大正３年５月新校主に就任した山本武五郎とは、御宿正定の実弟である。

なお、愛知簿記学校の分校が、知多郡半田中町にあった。(7)

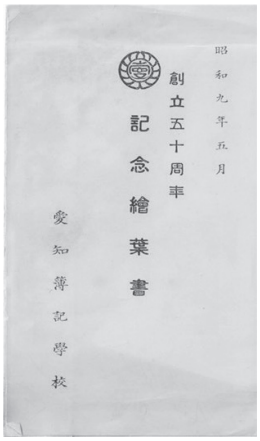
卒業生（卒業者数）の推移は、三つの資料からみることができる。

・『簿記學を學ぶ人の心得』：「明治35年２月4,000余人」(1)とある。

・「彰徳碑（興正寺）」　　：「大正９年５月までの卒業生が8,200余人」(13)とある。

・『愛知簿記学校々則』　　：「創立以来の卒業生は13,600有余人の多きに達し」(5)とある。

⑵　創立50周年記念繪葉書



← (a)

(b) ↑

↑ (d)

← (c)

(a)　創立50周年記念繪葉書用封筒（３枚の繪葉書が収納）

(b)　中央：御宿　正定（校祖）

　　左　：山本武五郎（校長 御宿正定の実弟）

　　右　：御宿　正系（校主 御宿正定の長子）

(c)　上　：旧校舎（名古屋市南大津町88番戸）

　　下　：新校舎（名古屋市中区丸田町６丁目30番地）

(d)　上　：愛知県知事表彰状（大正２年５月30日）松井 茂　　愛知県知事

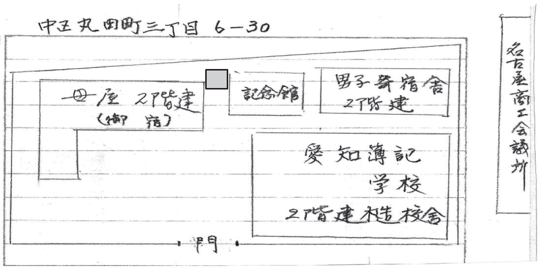
　　下　：名古屋市長表彰状（大正２年５月31日）坂本彭之助 名古屋市長

　　右　：彰徳碑（八事山興正寺にあった）

　　右下のイラストは、十露盤・簿記棒（丸定規）・ペン

⑶　戦前の愛知簿記学校（新校舎）見取り図（御宿正定ご令孫のメモ）

東側



西側

■は、防空壕

木 造 校 舎：1階　東側に小教室、西側に中教室　（卓球台）
2階　大教室

記　念　館：写真掲額〔御宿正定・山本武五郎・御宿正系・水谷保男（校友会幹事）
始め、後藤（職員）・野田（職員）・その他関係者〕
（ここには、御宿正定が尾張徳川家より拝領した日本刀が飾られていた。）

男子寄宿舎：1階　5部屋（1人から2人部屋）　バス・トイレ
2階　4部屋（1人から2人部屋）　バス・トイレは無し
遠距離の男子学生のみ
（但し、昭和20年の夜間空襲が始まる前に全員寄宿舎から帰郷した。）

防　空　壕：家族5人が入れる程度の大きさ

昭和20年3月12日夜間大空襲 3月19日　〃 3月25日　〃	名古屋の中心部は全焼

⑷　愛知簿記学校の学習内容[5]

〔珠算科学科目〕――――――――――――――――――――――――――――――

・運算上の称呼　・布数法　・加減乗除説明　・加減乗除基礎（九九）解説
・定位法　・単位法乗除　・復位法乗除　・開平法　・開立法
・速算練習（聴取速算・見取速算・計票連算・暗算）
・日用応用算（売買計算・保険計算・租税計算・利息割引料計算・期日平均法計算
メートル法度量衡計算・外国貨幣計算）
・研究科学科目（復位除法・各種算法乗除法・開平法・開立法・取引計算
工賃計算・利息計算・割引料計算・求積計算・雑計算・簿記計算

〔簿記科学科目〕――――――――――――――――――――――――――――――

・単記式ノ部（家計　製造　商業　農業　工業）
・複記式ノ部（商業　製造　家計　農業　工業　商工業組合）
・会 社 ノ 部（運漕会社　郵船会社　保険会社　鉄道会社　紡績会社　工業会社
醸造会社　商業会社　鉱山会社　商館）

・官 庁 ノ 部（町村役場　県立学校　県立病院　税務官署　府県庁　その他）
・銀 行 ノ 部（株式組織普通銀行）

〔研策科学科目〕－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

・会計監査　会計帳簿整理　会計帳簿組織立案　原価計算　創業解散清算事務、
ノ別ニ之ヲ定ム

－－

それぞれの科目については、愛知簿記学校発行の『（各々）簿記学例題』があったと考える。現在でも、これらの一部である21冊の『（各々）簿記学例題』は、【国立国会図書館デジタルコレクション】で確認することができる。【国立国会図書館デジタルコレクション】にはない、『運漕会社簿記學例題』についても例として、その構成を紹介する。

『運漕会社簿記學例題』[4]御宿正定著（愛知簿記学校，明治34年）

⑴ 株数一覧　⑵ 役職：役員名とその月俸　⑶～㉟ 取引の説明

※ 純益高　金 貳百貳拾八圓四拾六銭八厘 也

・日記簿５枚　・総勘定元帳４枚　・現金受払簿３枚　・月給明細簿２枚
・送品明細簿２枚　・株式勘定元帳５枚　・日計表５枚　・総計表半枚
・貸借対照表半枚　・損益表半枚

（明治30年８月16日発行　明治34年９月30日発行 再販）

⑸ 愛知簿記学校の同窓会誌『校友』[6]（昭和15年12月発行）

写 真 三 枚：①学童珠算競技会②①大会選手４名③校友会役員９名
標　題　紙：①「校友」タイトル文字②「写真」繁茂する本校農園
論　　　文：「新会計記帳事務私考察」（教員 後藤忠英）
競　技　会：学童珠算①記念競技会選手一覧表②成績発表
護 国 英 霊：軍服を着た２名の卒業生①写真②追悼文
校　祖　祭：当日の記念写真と解説文
総 会 の 記：昭和15年度①式次第②投稿文
卓球部記事：①校内試合②（愛知県傷痍軍人職業補導所との）対抗試合
紹　　　介：①帰郷会員②新幹事氏名③精勤賞授与人名
校　　　報：①卒業者80名②簿記単科258名③簿記研究科１名④珠算研究科１名
こ　よ　み：（自）昭和14年11月　（至）昭和15年11月
報　　　告：①校友会会計②卒業記念品寄付金③昭和十三年度卒業生諸君
連　　　絡：役員並びに会員名簿の異動

文中にある「校祖祭」は、毎年５月21日の開校記念日に、職員生徒並びに関係者の参列により、御宿正定の追悼の会が執り行われていた。『校友』には、「例年の如く八事山興正寺に於ける故御宿先生の碑前にて職員生徒並びに関係者一同参列の下に午前十時より追悼会を行ふ。」[6]とある。同誌には、彰徳碑のある八事山興正寺の五重の塔の前で、当時を偲ばせる八十名ほどの記念写真も収録されている。

⑹　愛知簿記学校が卒業生を大切にしていたことがわかる書物に掲載されていないエピソード

愛知簿記学校の校主が御宿正系の頃、出征する卒業生の兵士に出征記念品として、一振りの日本刀を贈呈し、戦場へ送り出していたようである（御宿正定ご令孫より）。

「御宿正定」が、尾張徳川家から拝領した、記念館に飾られていた日本刀との関係は、知る由もない。しかし、卒業生を大切に想っていた、とても素敵なエピソードである。

⑺　「愛知簿記学校」と「名古屋電気学講習所（現：愛知工業大学）」との関わり

「名古屋電気学講習所（現：愛知工業大学）」の創立者である後藤喬三郎（1866～1925）を、名古屋電気学園発行の『創立60年史』で、後藤淳（1927～2018）は次のように振り返っている。「当時後藤喬三郎先生は、旧尾張藩の御宿氏の屋敷の一部を借りて、名古屋英独語学校を経営し、教鞭をとっていたが、明治45年ごろ、（中略）名古屋電気学講習所の設立を決意したのである。」[17]

「御宿正定」の屋敷が、当時の総合大学（商業・工業・語学）であったならば夢が膨らむ。しかし、後藤喬三郎は、明治44年に設立した「名古屋英独語学校」を他に譲り、明治45年に「名古屋電気学講習所」を別の場所に設立した。したがって、「名古屋英独語学校」と「愛知簿記学校」の生徒が、同じ屋敷で一緒に学んだ期間は、一年間程という短い期間であったと考える。

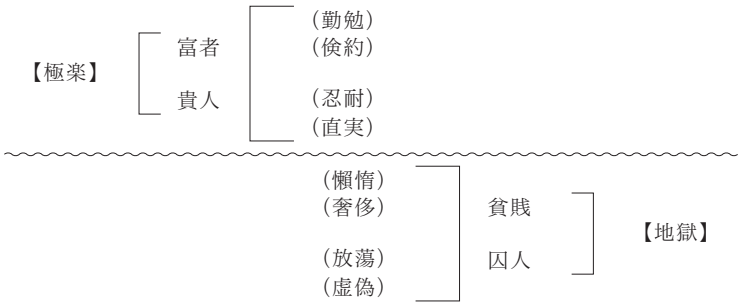
４．『簿記學を學ぶ人の心得』（愛知簿記学校の教育理念）

愛知簿記学校の設立から二十年後に発行された、この『国家宗門：簿記學を學ぶ人の心得』では、「簿記学を一種の国家宗門即ち精神教育の源本」であると位置づけていた。

「伊太利其他（中略）此宗門が国内に行渡りて居りますと国も富み人智も進み兵も強く国民の行状が言葉より実行が先に行われて居ました」[1]と伝えている。

「何故に此宗教が必要でありますかを述べますが（中略）国は富国と合同しましても居住する人の心を改良致させぬと戦はずして亡びます故に此宗教が必要であります」[1]と説いている。

【道徳教育を『簿記學を學ぶ人の心得』では、簿記の仕訳の理論で解説している】



「有形価値無形価値が四種の定則となるので其定則は損耗利益資産負債の四種でありまして世の中の事は総てこの四種の定則を交換して居る（中略）此損耗利益の語を換えて言ひますと消費と生産で資産負債の語を換へて言ひますと身代と借財です（中略）従来は経済学の内の一部に加

へてあつたよふでしたが此定則には報恩謝徳権利義務も悉皆此中に含有してありまして（後略）」[1]とある。

「損耗」「利益」「資産」「負債」の定則の中に、「報恩」「謝徳」「権利」「義務」も含まれると述べている。有形価値と無形価値には四種の定則があり、「損耗（消費）」「利益（生産）」「資産（身代）」「負債（借財）」の仕訳により、人生の行動とその結果を重ねて教えている。

⑴　取引があれば仕訳が発生[1]

・「受けたる恩があれば必ずこれに報ゆる労動が無くてはならぬ」
・「受けたる国恩に対しては忠を以て報ひ受たる」
・「親思（恩の誤植と考える）に対しては必ず孝を以て報ゆる」

⑵　人生済世の仕訳[1]

(a)　「極楽に暮さむとすれば富の四原則を守ねばならぬ此四原則とは勤勉と倹約と忍耐と直実の四者で悉く自己より渡すべき価値で此受取べき価値が富である」

(b)　「地獄を招かむとすれば前の四者を除きて富を得むとし或は得富を消費するの行ひをなすと地獄に身を置く事ができるので是にもやはり四原則があります此四原則は懶惰と奢侈と放蕩と虚偽の四者」

⑶　富の四原則

「勤勉」「倹約」「忍耐」「直実」があり、この四種類の原則は富と交換するとしている。

富の四原則の用語（「勤勉」「倹約」「忍耐」「直実」）については、『簿記學を學ぶ人の心得』以外に、この用語を探すことができる例を以下に二つ示す。

①「明治22年に創立された私立の東京商業学校の（中略）『商業道徳』と明治34年中島力造校閲『商業道徳教科書』（同文館）が出版された。（中略）第一章の『信用ヲ得ルニ必要なル諸徳』として、第一『正直』，第二『専心』，第三『自助』，第四『忍耐』，第五『勤勉』，第六『節約』，第七『體容』がある」[18]と記している。

このうち、第五『勤勉』第六『節約』第四『忍耐』第一『正直』が、『簿記學を學ぶ人の心得』の富の四原則に重なりをみることができる。

②『近江商人 中井家の研究』には、「すなわち経営者精神について見よう。このことに着目するとき、『勤勉』『倹約』『正直』『堅実』の四点をあげうると思う。」[19]と記述があり、『簿記學を學ぶ人の心得』の富の四原則に重なりをみることができる。

⑷　地獄に身を置く四原則

「懶惰」「奢侈」「放蕩」「虚偽」があり、この四原則は地獄に身を置くとしている。

5．名古屋の商業教育（明治期から昭和戦前）

⑴ 「愛知簿記学校」の創立期「私立簿記専門夜学校開設認可ニ付開申按伺について」[23]

創　　立：明治15年
開　校　認　可：明治17年５月21日
創立当初の名称：「私立簿記専門夜学校」
生徒教養の目的：簿記を教鞭し以て経済の端諸をシラシメンヲ要す
学　　科：「簿記」
教　育　課　程：第５級から第１級までの課程
第５級：単記式「コモンスクールブックキーピング：単式の部」
第１級：銀行簿記例題上下（佐久間貞一）などを教授
なお、第４級から第１級までは、複記式で教授

⑵ 簿記学の私塾「愛知簿記学校」

『愛知県の教育史』[20]によれば、愛知県で簿記教育をしていた私塾は、明治の中期には７校あり、後期には３校になったことが記されている。

〔明治16年から明治20年代の頃〕
①〔簿記数学校：岡寺正方〕②〔簿記夜学校：西川正次〕③〔愛知簿記学校：御宿正定〕
④〔簿記学館：安田融〕⑤〔浪越簿記学校：奥村岩太郎〕⑥〔名古屋簿記学校：三輪良之助〕
⑦〔簿記夜学校：前田鍵次郎〕

〔明治41年〕
①〔簿記数学校：岡寺正方〕②〔愛知簿記学校：御宿正定〕③〔簿記学館：安田融〕

愛知県が私塾を廃止する方針を打ち出した影響もあり、簿記学の私塾も減少することになったと考える。半田市教育百年史によれば、「学制発布の前後、県は再三、再四にわたって私塾を廃止するように布達していた。」[21]との記述がある。

また、「明治26年（1893）の実業補習学校規定により設置されたもので、（中略）その内容は半田商業専修学校沿革誌によれば、（後略）」[21]との記述がある。時代背景から当時の私塾は、実業補習学校や商業学校等の設立で、その数を減少させたとも考える。

⑶ 商業学校（昭和４年の調査）「第31回名古屋市統計書」[22]

(a) 実業学校（商業学校 甲種）

県立：愛知県商業学校	24学級	市立：市立名古屋商業学校	25学級
市立：名古屋市第二商業学校	17学級	市立：名古屋市第三商業学校	12学級
私立：名古屋女子商業学校	18学級	私立：名古屋育英商業学校	6+3（※）学級
私立：享栄商業学校	9学級	私立：中京商業学校	20+6（※）学級
私立：尾張商業学校	7学級	私立：東邦商業学校	15学級

私立：東海商業学校　5 学級　私立：愛知女子商業学校　8 学級
私立：名古屋第二女子商業学校　5 学級　（※）は夜間部を示す

(b)　実業学校（商業学校 乙種）
私立：名古屋高辻商業学校　3 学級　私立：名古屋商業実務学校　4 学級

(c)　私立各種学校
実業学校ニ類する学校　9 校　専門学校ニ類する学校　2 校
其他（簿記及珠算）　8 校

「愛知簿記学校」は、(a)実業学校（商業学校 甲種）と(b)実業学校（商業学校 乙種）には、その校名が存在しなかった。(c)私立各種学校19校に属していたと考える。

(4)　愛知県名古屋商業学校

現在の「名古屋市立名古屋商業高等学校」の前身にあたる「愛知県名古屋商業学校」は、1884年（同年に「愛知簿記学校」も開校）に開校された。1888年に名古屋市制が施行され、1891年に「愛知県名古屋商業学校」の管理が、愛知県から名古屋市へ移管された。その後の1901年の文部省令により、「市立名古屋商業学校」に改称された。戦後の1948年の新学制施行により、「名古屋市立第二高等女学校（名古屋市立第二高等学校）」と統合され、男女共学の「名古屋市立向陽高等学校」となった。このことにより、「市立名古屋商業学校」は廃止となった。しかし、1953年に、「名古屋市立商業高等学校」が設立され、1957年に「名古屋市立名古屋商業高等学校」と改称された[28]。

名古屋市立名古屋商業高等学校の『創立120周年記念誌』には、教祖は矢野二郎（1845～1906）であり、第五代校長は市邨芳樹（1868～1941）であったと記されている。矢野二郎が「愛知県名古屋商業学校」の教祖であったことを知る資料は、他に探すことは難しい。「世界我市場」の校風は、セントルイス万国博覧会（1906年）や日英博覧会（1909年）等に生徒作品を出品し、受賞していることが起因しているのではないか、と記されている。海外修学旅行の先駆けであろうか、1916年には、生徒12名と教諭２名で満州・朝鮮方面を訪れ、1917年にも、生徒14名と教諭２名で中国南部を修学旅行として訪れている[24]。

戦時下の1944年には、愛知県内の男子商業学校は、「愛知県商業学校（愛知県立愛知商業高等学校）」と「市立名古屋商業学校（名古屋市立名古屋商業高等学校）」以外は、募集停止または工業科等へ転換された[24]。

(5)　名古屋高等商業学校

現在の「名古屋大学経済学部」の前身にあたる「名古屋高等商業学校」は、1920年に全国で六番目の官立高等商業学校として設置された。戦時下の1944年には、名古屋工業経営専門学校と名古屋経済専門学校に改組された。しかし、戦後の1946年に名古屋経済専門学校に統一され、その後の1951年に新制名古屋大学に包括された。このことにより、「名古屋高等商業学校」は廃止となった[25]。

「初代校長の渡辺龍聖（1865～1944）は、これまでの商業専門教育では重視されていなかった

名高商が大きな成果を期待する科目として、『商業実践』、『商品実験』、『商工心理』、『能率研究』などをあげている。（中略）商工心理学も名古屋高等商業学校で初めて本格的に導入された科目で、商品の生産や販売、購買に関わる人間の適性や心理を研究するものです。（中略）渡辺といえば、その人格主義教育が有名です。そしてそれは、商業とも深い関係を持つものと考えられていました。」[25]と記述されている。

渡辺龍聖は、「今日の商人は、ただ徒らに算盤や文書を好くするのみでは駄目である。人格を高く修養円満にして然も才能あるものでなからねばならぬ。」[25]と述べたと記されている。

6．むすび

この研究をとおして、今後に二つの研究課題を残した。

⑴　愛知簿記学校は「私塾」で設立し、「私立各種学校其他（簿記及珠算）」として、終戦とともに廃止されたのか。

明治15年の開校認可の段階で、すでに「私立簿記専門夜学校」とあった。しかし、ある文献での調査によると、明治42年までは、私塾のグループとしての記述がある。明治23年に教育勅語が発布された後、『愛知簿記学校々則：愛知簿記学校の沿革』には、「明治24年１月26日教育勅語謄本御下附せらる」[2]と記述がある。このことにより、「愛知簿記学校は、その時代の文部省直轄の学校であったのではないか」、との希望と疑問が残る調査となった。

⑵　御宿正定の著書『簿記學を學ぶ人の心得』の簿記教育に対する「志（使命）」は、現代の簿記教育者に引き継がれているのだろうか。

明治20年代末には、高等商業学校でも授業が開始された「商業道徳」[18]は、ヘーゲルの「螺旋的発展」の法則により、「一段上がって古く懐かしいものとして、次世代に託すことができるのであろうか」、そのことを考えさせられる研究ともなった。

日本は古くから「神の名において、アーメン」[26]と記さずとも、信頼しうる「和式帳合のシステム」が機能していた。しかし、現代の決算報告書は、「大切なものを無くしかけているのではないか」、との心配がある。かつて二次元の無色透明であった「商業道徳」の形を変えて、空気のように決算報告書に添えられるように、『簿記學を學ぶ人の心得』を今一度学び直してみたい。

本稿は、「愛知簿記学校」の歴史を振り返り、埋もれそうになった「愛知県の簿記教育の宝物の一つ」を掘り起こすことができた。御宿正定の彰徳碑には、「士は時を知るを貴ぶ、或いは文威は武。勢を審にし力を量り、剣を投じ簿に対す。」[13]とある。『簿記學を學ぶ人の心得』を現代の簿記教育において、今一度学ぶことに価値を見いだすことのできる研究となった。

最後に、明治期（洋式簿記草創期）において、愛知県の簿記教育に貢献した三名の「簿記教育の偉人」を紹介して、本稿をむすぶ。

御宿正定	愛知簿記学校校祖『簿記學を學ぶ人の心得』（本稿で紹介）
市邨芳樹	愛知県名古屋商業学校 第5代校長 日本最初の女子商業学校設立〈女子商業教育の父〉(29)
栗原立一	『記簿法独学』(27)の著者〈愛知県師範学校の教師〉
	『日本簿記史談』に、「この書は初めて日本人が編集したものであり、半紙判、四七葉の小冊簿記書の最初である」(7)とある。

参考文献

(1) 御宿正定「簿記學を學ぶ人の心得」愛知簿記学校　明治35年
(2) 御宿正定「簿記學獨習雑誌：第3號」愛知簿記学校独習部　明治24年
(3) 御宿正定「単式工業簿記學例題」愛知簿記学校　明治34年
(4) 御宿正定「運漕會社簿記學例題」愛知簿記学校　明治34年
(5) 「愛知簿記学校々則」愛知簿記学校　昭和16年
(6) 「校友」第48号　愛知簿記学校々友会　昭和15年
(7) 西川孝治郎「日本簿記史談」同文館　昭和46年　424−426，278−280
(8) 西本三十二「日本の通信教育」10年の回顧と展望　日本通信教育学会　昭和32年　9
(9) 白石克己「生涯学習と通信教育」玉川大学出版部　平成2年　226，238
(10) 水谷盛光「郷土文化」第25巻名古屋郷土文化会　昭和46年　1−10
(11) 水谷盛光「文化財叢書第72号名古屋文化史談第3集」名古屋市教育委員会　93−101
(12) 名古屋市鶴舞図書館訳「名古屋市爆撃の効果」アメリカ合衆国戦略調査団
(13) 愛知県金石文集．上（名古屋編）　愛知県教育会　昭和17　1043−1045
(14) 「名古屋市会百年史」名古屋市事務局　平成4年　167
(15) 「近代会計百年」日本会計研究学会　昭和53年　178−188
(16) 野崎誠一「蛙鳴抄」　昭和45年　57−60
(17) 後藤淳「創立六十年史」名古屋電気学園 創立六十年史編集委員会　昭和47年　2−3
(18) 小見山隆行「日本商業教育史からみた連続性・非連続性の考察」愛知学院大学商学研究第50巻第2・3号　42，49
(19) 江頭恒治「近江商人 中井家の研究」東京雄山閣　平成4年　24
(20) 吉永昭「愛知県の教育史」思文閣　昭和58年　282
(21) 「半田市教育百年」半田市教育委員会　昭和47年　60，205
(22) 「第31回名古屋市統計書」名古屋市役所編纂　昭和4年
(23) 文部省指令並往復留「私立簿記専門夜学校開設認可ニ付開申按伺について」（名古屋区南大津町御宿正定）愛知県公文書館にて令和3年3月調べ
(24) 「創立120周年記念誌」名古屋市立名古屋商業高等学校　平成16年
(25) 堀田慎一郎「名古屋高等商業学校」名古屋大学大学文書資料室　平成17年
(26) 渡邉泉「会計学の誕生」岩波新書　令和元年　5
(27) 栗原立一「記簿法独学」明治9年
【参考ウェブページ】
(28) 名古屋市立名古屋商業高等学校ホームページ〈https://www.nagoya-ch.ed.jp/pages/gaiyo/enkaku.html〉
(29) ウィキペディア市邨芳樹〈https://ja.wikipedia.org/wiki/ 市邨芳樹〉

（受理日　2022年1月5日）